

茅の民俗—十五夜行事を中心として—

永松 敦（宮崎公立大学）

十五夜の月見にススキを供えることは、今日ごく自然に行われている。平安期宮中の月宴では、清涼殿の御前に、前栽を植えることが記されている。特に、『栄花物語』には、造花を植え、松竹、女郎花などが飾られていることが見られる。鎌倉期になると、『徒然草』には、「八月十五日・九月十三日は婁宿（ろうしゅく）也。この夜清明なる故にもてあそぶに良夜とす」と記され、十五夜と十三夜が併記されるようになる。近世に入ってから『御水尾院年中行事』には、「名月御さかづき、つねの御所にて参る。まづいも、次に茄子を供ず」とあり、作物を供えていることが記される。

平安期以後の記録により前栽とあることから秋草を供えることは当然のことと考えられるが、現在のように、特にススキが不可欠の供え物だという認識はあまり見られないように思われる。

それでは、何故に、十五夜、お月見にススキが不可欠な植物として認識されていくのだろうか？ また、ススキは十五夜以外でも重要な植物なのだろうか？

沖縄県宮古島野原のマストリヤーを見学した際に、地元の方から以下のような伝承を聞くことができた。

宮古島には十五夜の日にはススキを供える謂れがあるという。それは月の光に照らされても自分の頭の影がない。祈祷師に占いでは、今晚、その男の最も大切なものをススキの矢で射殺しなさい、という。男は愛馬を射殺すことにした。矢を放った瞬間に、馬は飛び跳ねてススキの矢はその奥にいた男を射殺した。一緒にいたのは自分の妻で、その男と共謀して夫を殺そうと包丁を研いでいるところだったという。

宮古島では十五夜にススキを飾るのは魔よけのためだと信じられている。

ススキを「茅」の一種と置き換えた場合、今、コロナ禍で盛んにおこなわれているのが茅の輪神事である。そして、粽（zòng ツォン）を茅巻きと称して、疫病除けとしていることにも注意する必要がある。五月五日の女の家伝承においても、屋根を蓬と菖蒲を葺く習俗には、茅を屋根に突き立てるところもある（五来重「五月五日は女の家」五来重『宗教歳時史』2009 五来重著作集第8巻）。茅は、先の宮古島の伝承にもあるように、悪魔よけの植物として認識されている。

屋根に、茅や蓬、菖蒲などを挿す習俗と、屋根から入り込む妖怪とを関連させた山本陽子氏の研究は興味深い（山本陽子「説話と海外に見る屋根・天井・軒における怪異」『説話・伝承学』第22号 2014）。玄関先ではなく、なぜ屋根に魔よけのための植物を取り付けるのかという発想は貴重である。

また、ススキを用いるのは十五夜の行事だけとは限らない。長野県の諏訪信仰、特に、御射山（みさやま）祭りにおいては大量の茅が用いられ、穂屋が作られる。旧暦7月26日～28日の祭礼で、各家では十五夜の飾り物のように、各戸でススキを飾る風習が残る。

南九州の十五夜の綱引き、装束などの茅の利用も独特であり、茅の視点から十五夜行事を見直してみたい。